

吉田健一著作集

XXX



變化
道端

集英社

吉田健一著作集 第三十卷

變化 道端

昭和五十六年二月二十日 第一刷印刷

昭和五十六年三月四日 第一刷發行

著者 吉田健一

發行者 堀内末男

發行所 株式會社集英社

東京都千代田區一ツ橋二丁目五番地一〇號

電話 東京 (二三〇) 六三六一 〈文藝出版部〉

東京 (二三八) 二七八一 〈販賣部〉

整版所 株式會社中臺整版

印刷所 大文堂印刷株式會社

製本所 株式會社石橋製本工場

© 1981 Nobuko Yoshida, Printed in Japan
0305-171030-3041 著者・監行者・印刷者・製本者

吉田健一著作集 第三十卷 目次

變化

道端

物語

山野

道端

木枯し

一人旅

歸郷

町竝

櫻の木

*

五

一七

一六

一五

一四

一三

一二

一一

一〇

九

博物記

小型の大動物

ネス湖の未知の大動物

海の大百足

琥珀

シベリアの動物

解題

二七

二九

三〇

三九

三六

三三

三二

變
化

I

歴史を振り返るとか今日の世界を見渡すとかいふことをする時に普通に我々が受ける印象は不斷の變化、それが激烈なものでもそれ程でなくとも免に角絶え間がない變化が行はれてゐるといふことである。又それがその通りであると一般に考へられてゐるやうで現在はどうか知らないが曾てはさういふことに就て一種の公式も同様になつてゐた進歩とか革新とかいふこともこの變化に或る一定の方向を與へる試みと解釋するならば納得出来ないこともない。ただ變化が絶えず行はれてゐるだけでなくそれが何か人間を満足させることに向つてゐるとする立場である。それは變化そのものに意味を與へること、或はそれを見出す努力をすることでは變化を實際に變化と認めることから始めるといふことを伴つてゐる。併しこの線に沿つて安心して考へを進めるには我々が變化といふものから普通に受ける印象が疑ひの餘地を残さないものであることを確める必要があつてこれはそのやうな餘地はないと簡單に決められることでない。

變化といふのは或る状態から別な状態に移ることを指すものである。併し當然さういふ場合に我々

の注意は主に一つの變化が起つたといふことの方に行つてその變化の性質からは眼が逸れ易い。それで例へば人間が死ぬのもそれまでゐた人間がゐなくなるといふ變化が起ることである。或はそれが或る一人の人間の死である場合は我々の頭の働き方がこの逆であることがあつても何千、何萬の人間の死といふことになれば我々にとつてそれはさういふ一つの變化が起つたことであつてその人數が多ければ多い程さうした一つの變化が起つたことの意識は比較的に強い。併し一人でも百人でもこの變化は人間が死ぬといふことの性質に掛つてゐて死ぬ人間の數によつてこの死ぬといふことの性質が百分の一のものになつたり百倍のものになつたりすることはない。これは今までにこの地上で何億、何千億の人間が死んで來たかを考へるならば解ることである。

併しそれでも西曆の十六世紀に支那で今までの所は世界史で最大の地震があつて八十萬人の人間が死んだといふことを知るとそれがその規模のものだつたといふことでその前と後、そこに起つた變化といふことが先づ頭に浮ぶ。又それがどういふ形を取つたかに就てはその前と後で非常な違ひがあつたといふ觀念が他のものを抑へてその觀念の影響でそこで何かが斷ち切られたと考へることになるのを免れ難い。或はそれは何かが斷ち切られたのであるよりも構はないが注意していいのはさう考へることがその地震といふ事情に即しての認識であるよりも大變なことが起つたといふ印象を我々が受けたことの延長であるのに止つてゐるといふことである。又これが變化といふものをただそれが變化である面からだけ見る時に我々が一般に示すことになる反應でもある。それは變化といふことが意識を領するに至つて我々が他のことを忘れるといふことだらうか。

勿論そのやうな働きを我々に及ぼすのが地震だけでない。寧ろ我々が歴史に接して知られることも今日の出来事といふことで聞かされることも主にこの變化といふことに重點を置いたもので變化がないことを改めて我々に傳へる必要はないといふ建前からすればこのことは頷ける。併し面倒なのは變化がない種類のことが我々に既に解つてゐると限らないこと、そのやうに變化がないことをそれ故に我々が無視し勝ちであることで歴史を變化の連續と見るのもこのことの影響を示してゐる。そこからもう一步進めば變化が認められないことはないも同然であることになつて我々はさういふことがないことを知つてゐる。又それは變化といふことにもその意味を失はせて或る状態から別な状態に移るといふことが言へるのはさうして移るものがあるからであり、それまでのものが別なものになるならば變化といふのは不斷の明滅のやうなものに過ぎないと見られるに至るのを免れない。

絶えず變化してゐてそれが同じ一つのものが變化するのでそのものの形がその度毎に明確になる所に變化することの意味がある。又それならば人間の歴史、或は今日の實狀が變化に富んでゐるのは我々に目まぐるしいといふ印象を與へることがない。更に又それで變化と單に一時的に珍しいことを區別する尺度が出来て人工衛星が飛んだりするのはさういふ一時的に珍しいことに屬する。既に科學、或はもう少し嚴密には熱力學の發達があれば人工衛星、或は宇宙船はその發達の性格を更に明確にするものでなくてこれを實證するに止るもので又地上にあるもの以外の沙漠のことが我々の知識に加へられてもそれもこの發達の性格を實證する域を出ないからである。さうすると我々が歴史に求めてそこから得るものも普通に言ふ變化であるよりも寧ろ持續に近いものではないだらうか。例へば一人の人間の一生はその人間の一生といふ一つしかないものであつてそのことを示す變化を我々はその一生

に追ふ。又それでその變化が我々に語り掛けるものになる。それと同じことを我々は人間の歴史に就てもしてゐると考へられる。

從つて變化と一時的に起つたのに止ることを區別することが出来るだけでなくて變化の方もそれが起つた時のその性格に應じてそれが持つ意味も違つて來て元龜、天正の時代といふものを例に取つてもこれをただ内戦が續いた亂世と見るのではこの時代をこの時代として受け取つてゐることにならない。その間に合戦が幾らでも行はれた中で信長が今川氏を亡ぼした桶狹間、同じく武田勝頼に決定的な打撃を與へた長篠、更に下つて秀吉が織田信雄と組んだ家康と睨み合つた小牧山の三つの合戦は江戸時代の文明の出現に向つて伸びる一つの線をなしてこれがあつて關ヶ原、或は大坂冬、夏の陣は寧ろ一つの持續のうちにある感じがする。それ故に桶狹間も長篠も或は桃山時代の豪華もその持續のうちにあり、そこにあるから或ることが起つたことが我々にとつて明白になる。この持續と變化の關係を示すものにその當時は合戦がある時に近所の住民が辨當持參で出掛けて行つて高みに陣取つて合戦の模様を何か催しものも同様に見物する習慣があつたといふことがある。その人々にとつて當時は合戦もその暮しのうちにあることで又合戦に加るものにもそれはその暮しのうちにあることだつた。

或ることが起る毎にそれまでのことがなくなるのでは變化は再び明滅に過ぎなくなる。フランス革命があつてフランス人が別な人種、或はフランスに住む人間が何か人間でないものになつたのでなくてフランスといふ國とフランスの國民がこれからもさうであることを續ける爲にこの革命があつた。もう少し詳しく言へばフランスの國が成立した歴史上の經緯が誰もが認めるに至つたことを圓滑に行ふ柔軟な性格を缺いてゐたのでこの革命が起つたのである。それがさうでなくて凡てがこれから新し

くなると一部のものに信じられたことは單にかういふ場合によくあることなのでそれが當時の少くとも看板板だつたことを示す材料も残つてゐる。或る貴族が公安委員會か何かに尋問されることになつて名前を聞かれて *Marquis de Saint-Cyr* と答へた。やうすると革命以來その侯爵といふやうな肩書は一切廢止されたことを指摘されてそれならばといふので今度は *Saint-Cyr* であると言つた。併し革命以來さうした *Saint* といふ風な宗教上の名稱も一切廢止されたといふ抗議が出て遂に *Cyr* だけになつた。所が *Cyr* は *Sire*、陛下と同音であつて革命以來さういふ敬稱は一切なくなつたのだと反對されてその貴族はそれでは *citoyen sans nom*、名なしの市民と呼んでくれと答へたといふ話がある。その滑稽は當時のフランスでも説明を必要としなかつた。この話が我が國では大眞面目に受け取られ兼ねないのは明治以來の機智の喪失による頑迷の仕業に過ぎない。

フランス革命が當時のヨオロッパで一つの脅威と受け取られたことは想像出来る。そしてそれは根本的には我々が今日この革命を變化よりも持續、或は一つの持續の杜絶を防ぐ爲の變化と見る丁度その理由によるものなのでこれはフランスだけでなくてヨオロッパ全體に既に用をなさなくなつてゐながら力でしか破れない因習を破つて別な粹、因習が用意される道を開くことを得させる性格のものでつた。併しいつの時代にも因習の働きをするものはその價值を問はずその時代の人間に生きて行く上での一つの基準を提供するものと考へられるのが普通でこれを失ふよりはそれまでの不都合に堪へることを選ぶといふ心理がそこでものを言ふ。その因習によつて身分その他を保證されてゐるものの場合にはなほ更である。實際には因習の方が別なのに代られることで凡てが失はれるのを免れる。それでフランス革命に續いて起つたナポレオン戦争はこの革命の延長だつたのでフランスだけでなくてヨオ

ロツバといふものに捨てざるべきものを捨てさせるにはナポレオンの天才的な軍略が必要だった。そのナポレオンが帝位に即くとか自分が始めた王朝といふやうなことを言ふとかしたのはこれに少しも背くものでなくてナポレオンといふ名もないものが帝位に即くのもかうしてフランスに曾てなかつた皇帝といふものになつてフランス人に君臨するのもそのこと自體がそれまでの因習の破壊だった。併しこれはその因習に代るものに屬することではなくて従つて長續きしなかつた。

舊弊を打破するといふ言ひ方は我々にとつて耳馴れたものである。又その字面、或は語感から壊すといふ觀念が先に立つて壊すのが舊弊であるのは單に壊すことを肯定させる働きをして後には壊すことだけが残る。それで街燈を打ち壊して廻つてその邊を自由の天地にしたと錯覺したりするのである。フランス革命で舊弊が打破されたと言へないこともない。併しそれならばその舊弊が何だつたかを考へる必要があつてバステイユ監獄が壊されて革命が成就したといふやうなことは今日の我が國の學生、或はそれを自稱するものが考へることである。當時既にこの監獄は名だけのものになつてゐて囚人はゐなかつた。又序でながら舊弊と言ふとそれが悪いことであるといふことから舊弊である以上それが舊弊でなかつたことがあつてそこからそれが始つたことが忘れられる。フランス革命で廢止された専制君主制は中央集權の別名だつたのでこれがそれ以前の混亂の原因をなしてゐた極端な地方分權からフランスを救ふ唯一の道だつた。その地方分權が舊弊でしなくなつてこれに代つたのが専制君主制の形を取つた中央集權でそれが用をなさなくなつてフランス革命でこれが除かれた。

従つてかういふ變化に見られるもの、或は一つの持續を持續させる種類の變化の根柢をなすものは當然のこと破壊ではない。我々は戦争とか革命とか言へば何か破壊的なこと、それが堤防を築くとい

ふやうなことになるれば建設的なことと考へるのに馴らされてゐるが人間がすることをさうした出来合ひの枠に簡単に嵌められるものでなくて堤防を一つ築くにも破壊されるものは破壊されるのであり、この破壊的と建設的の區別を安易に用ゐることに疑ひを持たない時にこれに従へば破壊的であることになるナポレオンのエジプト侵入でロゼッタ石が発見されたことが今日の古代エジプト學の基礎をなしてゐるのが同じ分類に従つて建設的であることになる。寧ろさうした區別を強ひて用ゐるならば今日のヨオロッパにその形を取らせるといふ結果を生じたナポレオン戦争自體が建設的なものだった。これはそのやうな分類にこだはる必要はないといふことで變化はただ變化であつて何的でもなくてそれがそのまま持續でもある場合に我々はそこに人間の歴史、又人間の世界を見る。

それで變化といふことに就て考へ直してもいい。もし最近までどこかの植民地だった所が獨立して主權を持つた一國になればただそれだけのことを念頭に置いて我々は一つの變化が起つたといふ印象を受ける。又それだけでもそれが一つの變化であるのは間違ひないことであるが我々がそれで知るのは或る變化が起つたことでそれがどういふ變化であるかはその國が植民地だった頃からのその國といふものを明かにするのでなければ解らない。ただ植民地が獨立國になつたといふのではその變化に就て掴めることが餘りにも少くてそれが變化であることも疑しく感じられる。又それがその通りに變化と言へる程のものでないこともあれば北アメリカにあつた英國の植民地がアメリカ合衆國になつたやうに一つの持續の上での變化であつてそれだけアメリカといふものが明かになることもある。従つて變化が我々に變化と受け取れる爲にはそれが普通にこの言葉、觀念が我々に與へる印象と違つて寧ろ一つの線に沿つて起る幾つかの出来事の一つであるといふ性格を持つものでなければならぬ。

細川幽齋が太鼓の稽古をしてゐた時にその師匠が幽齋にまだ撥が切れないといふことをいつも言つてゐた。これがどういふことなのか幽齋には解らなくてただ稽古を續けてゐたが或る日太鼓を打つてゐてその意味を覺つたので直ぐに師匠を呼びにやり、それを待つてゐられなくて又太鼓を打つてゐると門から入つて來た師匠がその音を聞いて幽齋に撥が切れましたと言つた。これが變化であることが一般には認められなくてその代りに勉強が實つたとか精進の賜ものとかいふことで問題が片付けられる。或は何か勉強してゐればそれが實るのは當り前であるからこれは變化でないといふのだらうか。併しもしその實るといふ形で變化がなければ何を勉強しても仕方がないので又實るといふ努力の積み重ねで得られることは變化の正當な一つの型でもある。この持續がなくてどのやうな變化もない。もし山が一つ眼の前で崩れ去るならばそれも一つの變化であるがそれはその時起つたのでなかつた。

これは我々が變化を變化と認めるにはそれと付き合はなければならぬといふことである。或る詩人、或は文章家が残したものを丹念に讀んでゐればその詩や文章が變化して行く具合が解る。これに對して大地震があつてその途端に家が倒れたり床が落ちたりし始めればそれはその瞬間のことなので我々はその時に起つたことをその通りにしか認めずその後の餘震やその結果に馴染むに従つてその地震といふ變化が起つたことが呑み込めて來る。それ故に新聞でその地震があつたことを讀み、その新聞で他にどこかで旅客機が落ちたことや誰かが内閣を組織したことを知つて我々が不斷に變化が行はれてゐる狀況にあると思ふのは變化を單に今までと違つたことの程度に考へてゐるので我々にとつて新聞に出てゐるその種類のことが實際には變化でない證據に我々ほどのやうな變化も自分に及ぶのを感じないでゐる。それは正確には寧ろその數だけの出來事に過ぎない。